

## キリストのかたち (6) クリスチャンの成熟

コロサイ 1:25~29

## 1) 信仰者の誕生と成長

聖書の真理は、しばしば誤解されることがあります。「救い」という大切なことにおいてさえ誤解があります。その誤解のひとつは、イエス・キリストの救いを、わたしたちが神を求めはじめ、信仰を言い表してバプテスマを受けるところまでに限定してしまうことです。わたしたちの多くは、いままで神のことを考えたこともなく、聖書を読んだこともありませんでした。けれども聖書を読み、学ぶ機会を与えられ、それによって救い主イエス・キリストに出会いました。イエス・キリストがわたしの罪のために死んでくださったこと、わたしに永遠の命を与えるために復活してくださったことを信じ、バプテスマを受けることによって、その信仰を公けに言い表わしました。わたしたちのバプテスマのとき、神もまた、「あなたの罪は赦された。あなたは神の前に正しい者とみなされた。あなたは神の子どもとされた」と宣言してくださったのです。聖書に「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」(ローマ 10:9、10) とある通りです。わたしたちは、このことを「救い」と呼び、「わたしは救われました」と証しします。

イエス・キリストを信じてバプテスマを受ける。それは闇から光へ、死からいのちへ、罪の奴隷から神の子どもへという、180度の大転換です。ただ、子供が生まれたという場合、赤ちゃんは自分の力で生まれてくるのではなく、「産んでもらう」ということが事実ですが、同じように、わたしたちは自分で自分を救うのではなく、「救っていただく」のです。救いについては常に受身です。もちろん、「イエス・キリストを信じる」というのは自分の働きかけですがそれは自分が信じたから救われたわけではありません。人がなすことは「イエス・キリストの十字架によって救われる」ということを信じるということです。つまり、救いについて自分の出来ることは何もないのです。あるのはイエス・キリストによる罪の赦しと救いを信じるということだけです。それを私たちはいつの間にか「救われるためには何をしなければならないのか？」とゴールのように考えてしまうのです。

実は救いには過去と、現在と、将来の面があります。「すでに救われ、今救われ、やがて救われる」ということです。イエス・キリストを信じ、バプテスマを受けることはとても大切なことで、いくら強調しても、強調しすぎることはありません。しかし、「救い」はバプテスマというところで終わるわけではありません。むしろ、そこから出発して天に向かっていく長いラインもまた「救い」です。バプテスマは「救い」の始まり、信仰のスタートラインです。そこからクリスチャンの成長という「救い」のもうひとつの面が広がっていくのです。イエス・キリストの救いの全体を見ていないと、わたしたちはスタートラインをゴールと取り違えてしまって、いつまでもスタートラインをうろうろするだけになってしまいます。バプテスマが一大事業のようになってしまって、大きなことを成し遂げたように勘違いしてしまうのです。はっきり言ってバプテスマを受けるためにイエス・キリストを信じる以外に私たちのすることは何もありません。信仰生活の出発点であるバプテスマをことさら大げさに取り上げるとそれですべてが終わってしまったと思いやすいのです。

## 2) 信仰者の成熟を願って

子どもが生まれる。それはうれしいことです。けれども、もし、生まれた子どもがいつまでたっても体重が増えない、ハイハイしたり、歩いたりできない、言葉を話せないとしたら、両親はどんなに心配なことでしょうか。健康に育ったとしても、両親に反抗したり、兄弟をいじめたり、家族のルールを平気で破るようになったら、どんなに心を痛めることでしょうか。同じように、イエス・キリストを信じ、救われたクリスチャンに霊的な成長が、しかも、健全な成長がなかったら、それはとても悲しむべきことです。

使徒パウロは、コロサイ 1:28 で「私たちはこのキリストを宣べ伝え、あらゆる知恵をもって、すべての人を諭し、すべての人を教えています。すべての人を、キリストにあって成熟した者として立たせるためです。」と言いました。ここで「成熟した者」と書かれているのは前の新改訳第三版では「全き者」と

訳されています。「全き者」というと何か「完全な者」「理想的な者」というようにも受け取れ、それでは建前上の言葉になりかねません。そう思われませんか？ 例えば「クリスチャンとしてあなたは全き者、完全な者にならなければならない」と言われたら尻込みしてしまいます。このことばの意味としては「成熟した者」がそれに近いと思います。クリスチャンがこのような人になってゆくことがパウロの弟子作りの目標でした。似たようなことばに「成長」ということばがあります。これも聖書の中でよく出てくる重要なことばです。「成熟」と「成長」は似ている要素が多くあると思います。あえて違いと言うなら、「成長」とは比較的变化が分かりやすいことと言えます。子供のころからすると背が高くなった、体重が重くなった、勉強して以前分からなかった問題を今、解ける、以前出来なかった仕事を今は出来ると言ったように「成長」とは分かりやすいと言えます。一方「成熟」についてはより深みのある信仰者の姿と言いましょかその人の人生から出てくる真実な生き方、ことばといったことです。私はそのことを料理に例えて思い浮かべます。素人がそこそこの料理を作るためには材料をそろえて、アドバイスを受けながらレシピ通りに調理すると出来ると思います。それは成長といえます。しかし同じ材料を使ってもそれぞれの家庭の味に微妙な違いが出てきます。あるいはその人にしか出せない味や風味がある、それを成熟と言えるのではないのでしょうか？ クリスチャンの人生といってもそこには祈った通りにうまくいったこともあれば、その何倍ものうまくいかなかったこと、失敗、犯した罪で惨めな思いになったことが誰でもあると思います。このコロサイ書を書いたパウロにとってその一つは自ら抱えていた病気ということがあったと思います。目であったか、足であったか、はたまたひどい頭痛持ちであったという説がありますがとにかくパウロには日常生活に大きな影響を与える病がありました。パウロはそれが癒されるように何度も祈りました。パウロは癒されることが自分のためというよりも、神様にとって益となると信じて祈っていました。しかし、パウロは癒されませんでした。神様から返ってきた答えは「私の恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである。」コリント第二 12:9 でした。その中でパウロは信仰者としての自分の考え方を大きく変えさせられたのです。パウロはクリスチャンとなった初期の頃はキリストを知らない人々にイエス・キリストを知らせることだけが自分の使命だと信じて行動していました。しかしその歩みの中で神の子どもとされた人々が成熟したクリスチャンへと変えられてゆくために自分の弱さや失敗をも用いて下さるということに気づくようになったのです。パウロはどのような事柄の中にも成熟した信仰者とされることを主は備えていてくださることを学びとったのです。

### 3)成長無くして成熟は無し

「芸道とは型に入って型に出ることに尽きる」とはよく言われることです。何よりも先ず弟子は師匠から型を学び、そしていつの日か自分なりのクリエイティブなものを造りあげてゆくことを言っています。信仰生活も同じだと思えます。今日は信仰者の成熟について学んでいますがそのためにはまず成長を目指すところから始める必要があります。しかるべき成長を遂げてゆくと成熟が見えてきます。特にクリスチャンの成長のために神が与えてくださった恵みのうち、三つのものに心に留めたいと思います。

その第一は「御言葉」です。ペテロ第一 1:23-25 にこうあります。「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは永遠に立つ」とあるからです。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。」ここでは、この世の栄光は草花のようにはかないが、神のことばは永遠のものであり、人を生まれ変わらせる力があると教えられています。神の言葉はわたしたちの心に植え付けられた「種」だと言われていますが、御言葉の種にはいのちがあり、その永遠のいのちが成長していくのです。世界を「言葉」で創造された神は、わたしたちを神の言葉で造り替えてくださるのです。続くペテロ第一 2:1-2 では「ですからあなたがたは、すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と教えられています。神の言葉によって神の子どもとされたクリスチャンは、同じ神の言葉によっておとなのクリスチャンへ

と成長していくのです。

第二は「祈り」です。神が聖書によってわたしに語りかけておられるのですから、わたしたちにはそれに答える責任があります。神の語りかけを無視するわけにはいきません。神が聖書によってわたしたちに語りかけ、わたしたちは祈りによって神に返事をする。御言葉と祈りの双方向のまじわりの中で、わたしたちは成長していくのです。「祈り」というと、すぐに「願いごと」になってしまうことが多いのですが、御言葉への応答の祈りをこころがけていくと、祈りによって神とまじわるということが体験として分かるようになってきます。たとえば、「あなたはわたしに忘れられることはない」(イザヤ 44:21) という言葉を読んだなら、「神さま、わたしはあなたを忘れることがしばしばですが、あなたはわたしを忘れないと言ってください。なんと素晴らしいことでしょう。ほんとうにありがとうございます。」との祈りが出てくるでしょう。受け入れられないみことばがあったなら「素直に受け入れるのは難しいですが願わくは少しでも受け入れることが出来るように力を与えてください」といったように祈れば良いのです。祈りの習慣を身につけるのは良いことですが、だからといって習慣的に祈るのではなく、御言葉を心の中でよく反芻し、御言葉に応答する祈りをささげるよう、努めてみるようにしましょう。

第三は「教会」です。子どもにとって、何よりも自分を愛し、守り、支えてくれる家庭が必要です。それは、神の子どもとして生まれたクリスチャンにとっても同じです。わたしたちをご自分の子どもとして生んでくださった父なる神は、そのことを一番よくご存知で、神の子どもが成長する場所として教会を備えてくださいました。神は、神の子どもたちを、神の家族、教会の中に生んでくださるのです。バプテスマを受けた人は、教会のメンバーとして迎えられ、そこで育てられていくのです。

礼拝は神の家族としての教会がいちばんよく表わされているところだと思います。家庭でいろんな話が活発におこなわれるのはダイニングルーム(食堂)だと思いますがどうでしょうか？ 礼拝はいわば教会のダイニングルームです。実際、礼拝堂には主の晩餐のテーブルが備えられているではありませんか。神の家族はこのテーブルを囲み、御言葉の糧を受け、パンと杯を受け、詩と賛美と霊の歌をもってまじわるのです。ここでたましいの飢えを満たされ、渇きをいやされ、温められ、励まされ、祝福に生かされるのです。

キリストを信じることによって始まる人生、キリストを知ることによってこの世では満たされることのない人生が満たされるものへと変えられてゆくことの不思議をパウロは「奥義」と呼びました。クリスチャンにはそのような奥義が与えられていることを再認識したいと思います。ご一緒に成熟を目指して歩んでまいりましょう。